インタビュー1

観光と伝統と革新プロジェクト

経済学部 丸山　　優 教授

プロフィール

1950年生まれ。西洋経済史（特にイタリア経済史）と比較産業組織論を専門分野とする。主な研究課題として「ポスト大量生産体制の日米欧比較」「イノベーションの普及を速め新産業を生みだす地域システム」。趣味はラグビーで、現在、日本福祉大学ラグビー部部長も兼任している。

どのような取り組みをされるのですか

愛知県常滑沖に中部国際空港が２月17日に開港し、名古屋東部丘陵（長久手町、瀬戸市、豊田市）では、愛・地球博（愛知万博・2005年日本国際博覧会）が３月25日に開幕します。

愛・地球博は、日本での総合的な国際博覧会としては、1970年の大阪万博以来35年ぶりとなります。今世紀最初の万博となる愛・地球博の空の玄関口となるのが、中部国際空港であり、国内はもとより、世界の各国から多くの人々が訪れます。中部国際空港は、愛・地球博を契機に、今後、我が国各地と世界を結ぶ新しい窓口として、我が国の経済発展はもとより、知多半島の地域発展への寄与が期待されています。

そのような中部国際空港の位置する知多半島という地域にある大学として、空港がどのように利用されているのか、そして、知多半島という地域に対して、どのような影響を及ぼすのか、ということを学生とともに調査して、地域のあり方を提言していくのがプロジェクトの基本的な内容です。

開港して３週間余り過ぎた３月11日、12日の両日にわたって、中部国際空港において利用者調査を行いました。この調査は、中部国際空港株式会社と本学とが連携して行ったもので、日本でも初めての取り組みと言えます。

調査は、国際線の出発利用者、到着利用者、国内線の出発利用者、到着利用者、そして、旅行目的ではない見学や買い物などで訪れた一般来港者に対して、５種類の調査票を用意して行いました。前日の現地での調査説明会を含めると３日間にわたり、94名の学生が参加しました。

本学と中部国際空港株式会社との連携における空港利用者調査は、時系列的に３年間にわたって行う予定です。今年度の空港が開港して３週間余り経った今回の調査を皮切りに、来年度は、愛・地球博開催期間中の８月頃、そして、少し時間をおいて、来々年度に、愛・地球博も閉幕し、地域に空港が根づいてきた頃に第３回目の調査を行う予定です。

学生たちに学んでほしいこと

空港調査は、上に述べるように５種類の調査票に基づく多岐にわたる本格的な調査なので、実践を通して社会調査の基本をしっかりと学んでもらいたい。ただ紙を配って書いてもらう調査と違って、実際に学生たちがインタビューをして行う面談型調査なので、骨が折れます。しかも、学生たち自身が調査項目の意義をしっかりと理解していなければなりません。ただし学生たちにとっても、なかなかそのような機会があるものではありません。

また“消費者行動”という視点から、学生たちに今回の調査データをもとに考えてもらいたい。消費者の行動から見て、空港が、また地域が新たにどのような財・サービスや機能を用意すべきかなど、マーケティングの勉強にもつながります。

そして、今回のような大学と地域とが連携した活動を通して、地域再生への提言を積極的に行ってもらいたい。空港ができたことによる地域への組織体制への提言や知多半島の情報発信など地域おこしに空港を結びつけるような学生ならではの柔軟な発想・アイデアを期待しています。

地域への貢献について

知多半島には、日本三大新四国霊場（※末尾に語句説明）のひとつがあります。知多四国霊場には、年間10万人もの人々が訪れます。それだけ、知多半島には、滞在型観光になじんだ地が点在していると言えます。知多半島の観光を含め、これからの観光というのは、滞在型にもっと力をいれていくべきと考えています。

“調査なくして発言なし”と言われるように、今回の空港での調査を活かして、地域のマーケティング、地域の掘り起こしに大学として積極的に関わっていきたい。消費者ニーズをしっかりと吸い上げて、ボトムアップ型で知多半島の５市５町と共に、現代GPを通して学生参画のもと行っていきたい。

また、空港を利用される旅行者に対しては、もっと大勢の人に知多半島の魅力を知ってもらうためにも、トランジット客をターゲットとした知多半島の観光ルートづくりに積極的に関わって地域に貢献していきたい。

※新四国霊場とは、弘法大師の足跡として、信仰を集める四国八十八ヶ所霊場めぐりを地方にうつしたものです。知多四国霊場の開創は、江戸時代後期で、妙楽寺の和尚・亮山が、知多半島に霊場を開けという弘法大師のお告げを夢で見たことに始まったといわれています。

インタビュアー：現代 GP コーディネーター　名倉　弘二